

【講演会報告】

カザフスタンから帰国して

三浦正雄氏講演会

(2006年度第3回 日本文化人類学会北海道地区研究懇談会・北海道民族学会 共催講演会)

津 曲 敏 郎

開催日：2007年2月17日

開催場所：北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W309 教室

講師：三浦正雄氏

自分の意志に反して異郷での生活を余儀なくされたとしたら、しかもそれが半世紀にも及んだとしたら…。そんな過酷な体験を、三浦正雄氏は静かに語り始めた。用意した日本語のメモを読み上げる、そのたどたどしさが日本を離れていた歳月の長さを感じさせた。はじめの10分ほどそのようなかたちで、帰国までの経緯をおおまかに話したあとは、通訳を介してロシア語での講演となった。永山ゆかり氏（北海道大学スラブ研究センター研究員）による的確な通訳のおかげで、三浦氏の思いが聴衆の心にじかに届く会となった。

氏は1932年、当時日本領だった樺太に生まれ、終戦までを過ごした。母は早くに亡くし、たくさんいた兄弟との生活も長くは続かなかったという。ソ連の侵攻にともない、三浦少年は一足先に北海道に帰され、父と兄が残った。1年が過ぎても父と兄は帰って来ない。待ちわびた少年は、肉親を探す4人の大人たちに混じって小舟で樺太に向かった。たどり着いた樺太で待っていたのは、ソ連の国境警備隊だった。裁判は13歳の少年にも1年半の収容所暮らしを命じた。大人たちは3年の刑期だったというから、多少の配慮はあったと言うべきだろうか。しかしシベリアの収容所に連行されての強制労働は容赦なく課せられ、1日わずか300グラムの黒パンは育ち盛りの飢えを満たすものではなかった。苦難に満ちた1年半を必死に耐えたのは、刑期を終えれば日本へ、いや、少なくともサハリンへは帰してもらえる、という希望があったからだろう。しかし、刑期を終えた少年に手渡されたのは、さらに遠いカザフスタン行きの命令書だった。

たった一人で放り出されて、ロシア語もわからず頼る人もなく、貨物列車を乗り継いでのカザフ行きは、辛い不安な旅路だったという。講演のかなりの時間を割いて、この道中の思い出を語った。出発の駅で、わずかな食料と所持品の入った袋を盗まれたこと、「泥棒！」と叫びたくても言葉がわからず叫べなかったこと、市場で綿入れ外套をお金に換え、それでパンを買ったこと、人々が子どもの自分を憐れんで親切にしてくれたこと等々。

やっとのことでたどり着いたカザフスタンも、戦後の混乱の中で、その生活は困難をきわめた。当初は住む家さえなく、地面に穴を掘って板で覆っただけの地下住居で寝起きたという。イリ川の漁業コルホーズで働きながら、徐々にロシア語やカザフ語もおぼえる。仕事熱心な彼は現地にも溶け込み、ミマイルと呼ばれて信頼を得る中で、猟師や運転手の仕事もこなす。チュルク系のカザフの人々が日本人に親しみを寄せてくれたことも助けになった。帰国をあきらめたわけではなかったが、長い異郷生活の中で、同じような境遇にあったドイツ女性と結婚、二人の子どもにも恵まれた。

北海道に戻っていた兄と手紙で連絡が取れたのは東西冷戦のさなかで、ソ連政府は帰国を認

めようとしなかった。やがて 91 年にソ連崩壊、カザフスタンの独立と、社会情勢が変化し、在カザフスタン日本大使館員の計らいもあって、95 年に一時帰国が実現した。しかし帰国を待ちわびていた兄はすでに他界していたという。このことを語るとき、三浦氏は声を詰まらせ、涙をぬぐった。

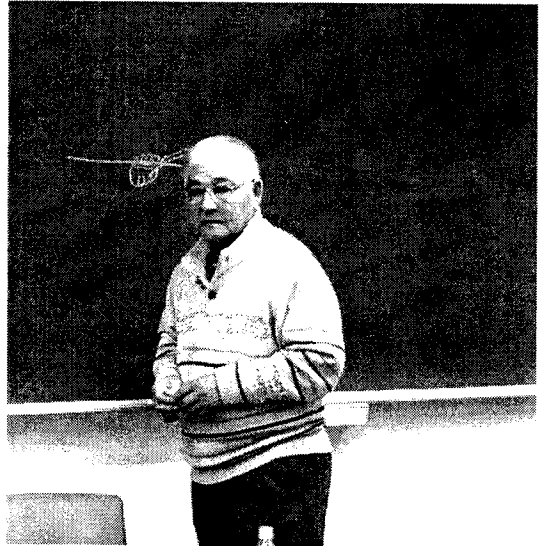
この一時帰国を機に、日本サハリン同胞交流協会の支援を得て、2002 年家族（妻と息子夫婦）とともに永住帰国を果たした。その決断の背後には、みずからの望郷の念だけではなく、妻の病気を日本で治療したいという夫としての思いと、息子夫婦のカザフでの将来を案じる父親としての思いがあった。そもそも異郷に渡ることを決心したときも、いざ帰郷する段になっても、常に三浦氏の心を占めていたのは家族のことだったのだろう。

カザフスタンは川や湖が多く、渡り鳥もたくさんやって来るという。空を自由に行く鳥を見ては、帰れないわが身を嘆いたこともあった。あるとき傷ついて飛べなくなった白鳥を見つけ、餌を与えてしばらく保護していた。やがて仲間の白鳥が旅立ちの日を迎えたとき、その白鳥は空を見上げて目から涙を流して泣いたという。飛べない白鳥の姿に、わが身を重ねたに違いない。

こうして歴史に翻弄されながらも、想像を絶する苦難に耐えて生き延び、帰国を果たせたのは、もちろん強靱な肉体と精神力があつてこそであろう。しかし、それだけでなく、柔軟な適応力と謙虚な誠実さもまた大切なことを教えられた気がする。当初予定していた時間を延長して、3 時間に及んだ講演の中で、三浦氏の口からソ連当局や日本政府の対応を恨むような言葉は一言も聞かれなかった。むしろ周囲の人々の暖かさに感謝する言葉を何度も口にしました。「55 年のあいだ、このように暮しました」。講演の最後を締めくくる、その静かな言葉の重みは、聴衆の胸に深く刻まれたに違いない。熱心な聴衆（約 25 名）の中には、以前から三浦氏のことを知り、さまざまな形で支援している人たちの姿も多く見られた。また中央アジアの環境問題に取り組む石田紀郎・京都学園大学教授（日本カザフ研究会代表）も駆けつけ、三浦氏とカザフスタン以来の再会を喜ぶ場面も見られた。

日本に帰るまでのことは、忘れてしまいたいような辛い思い出だという。しかし今、それを伝えておきたい気持ちから、このような講演を初めて引き受けた。氏の話の間近に聞いて、歴史の証言としてこのような事実を次の世代に語り継ぐことの重要性を痛感した。氏自身で書き残すことがむずかしければ、それを支援し、聞き書きを行い、記録にとどめるような若い研究者が現れることを期待したい。

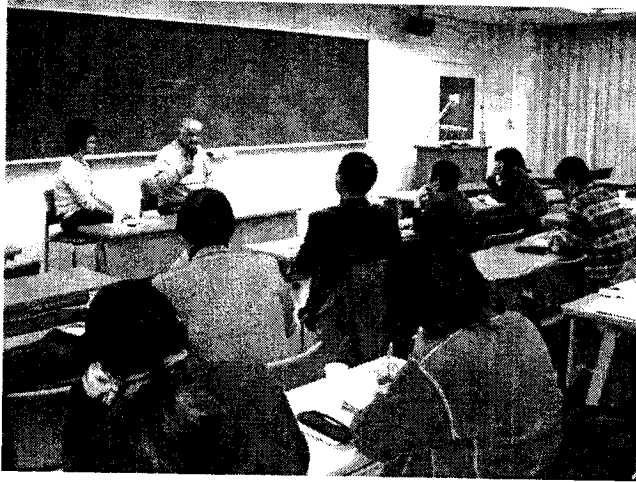
今はそばに住む孫と会う時間が楽しい、と講演を終えての道すがら語る氏の横顔は、温かな祖父の顔であった。



三浦正雄氏

なお三浦氏については、次のような新聞記事・テレビ番組がある：

○「歴史に漂い数奇な人生：ミウラ・マサオさん」『東京新聞』1992 年 11 月 24 日（講演当日、



資料として配布)。

○「戦後、家族捜しに樺太へ：永住帰国まで 56 年」『朝日新聞』2002 年 12 月 2 日 (講演当日、上記石田教授より提供を受けた)。

○テレビ東京制作番組「東京～ロンドン大陸横断 2 万キロ・日本のタクシー大冒険」の中でカザフ在住の三浦氏を訪問・取材。2000 年 11 月 23 日放送 (講演参加者の一人からビデオの提供を受け、当日一部放映)。

(つまがり・としろう／北海道大学)